

記
録

原爆被災前後の思い出

荒谷孝昭

日時 平成二八年七月二二日一四時～一六時

場所 荒谷孝昭邸（広島市西区）

語り手 荒谷 孝昭（広島大学総合科学部名誉教授、広島高等師範学校卒業生・昭和二〇年理科第二部卒業）

聞き手 布川 弘（広島大学大学院総合科学研究科教授）
石田 雅春（広島大学七五年史編纂室准教授）

経緯 文書館の布川弘副館長に対して、内山敬康名誉教授より

荒谷氏が被爆体験を残すことを希望しているという相談があった。これまで被爆体験を公に証言したことがないとのことであり、文書館の資料収集の一環として荒谷氏へ聞き取り調査を行った。

ただ、荒谷氏のご高齢のため発声が不明瞭であった。そこで本稿の作成にあたっては、通常のテープ起こしではなく要約筆記を行い、完成した原稿を荒谷氏に校閲してもらった。校閲に際し荒谷氏より手記の提供

を受けたため、これを参考資料として掲載した。
なお、荒谷孝昭氏は原稿校閲直後の平成二八年一〇月二四日に永眠された。ここに謹んで故人のご冥福をお祈りしたい。
（石田記）

—先生はどちらのご出身なのでしょう。

荒谷 神奈川県横須賀市です。五年ほどいて、父が呉市の海軍工廠に移ったため呉市に引っ越してきました。父は軍官技術将校で軍官少佐までゆきました。呉では片山小学校に通っていました。中学受験をしたのですが、最初の年は不合格で二河町にあった高等小学校に一年間通い、翌年合格して呉二中（現宮原高校）に入学しました。

小さい頃は体が弱く、四歳の時疫病にかかりました。また小学二年生の時は運動会に出させてもらえなかったことを覚えています。元氣になったのは中学校に入ってからで、徒歩で通学したこと、剣道で鍛えられて体が丈夫になりました。

―昭和二〇年八月は、どちらの学校に通われていたのですか。

荒谷 広島高等師範学校理科二年生の四年生です。戦時措置で卒業が半年繰り上げ（昭和二〇年九月卒業予定）になるとともに、徴兵延期の特例が廃止されました。その際に陸軍の将校がきて「この中で特攻隊に志願するものはいないか」と言われたので、私は志願しました。

幸い検査に合格し土浦の航空隊に入ることが内定しました。高等師範学校二年生は東洋工業にいたので、時間を有効にするため、グライダーの訓練をしていました。グライダーの訓練は広島駅の北側の東練兵場で行いました。グライダーの練習は困難です。綱を引っ張るとグライダーがグリーンとあがります。あがったら飛行しながらS字回転をしてもとの位置に着陸します。地上に白い枠がありその中に収まるように着陸すると合格で褒められました。

―どうして東洋工業におられたのですか。

荒谷 私の勤労働員です。高等師範学校の二年生の時は観音の三菱重工で作業しました。その後東洋工業に替わりました（別紙参考資料参照）。東洋工業には勤労働員で近辺の複数の女学校から約二千人の生徒が来ていました。私は会社の川村勤労部長から依頼されて、これらの女子生徒の仕事の割り振りを行っていました。女子生徒は交替で建物疎開作業を行い、このなかに広島女子高等師範学校附属山中高等学校の一年生達がありました。

―なぜ原爆投下直後に広島市内に行こうと思われたのですか。

荒谷 広島がどうなっているのか気になったから行きました。市内に近づくこと広島市から呉市の方にけがをした人がたくさんやってきました。私は広島市の猿猴橋のところで憲兵と巡査の入市を禁止していたので、呉から来た軍のトラックに乗ったのですが、周辺が燃えだしたので比治山の山陽記念館（頼山陽文徳殿のこと）入口のところで停車しました。

私も熱いから猿猴橋の方に逃げました。猿猴橋のあたりについていたら家が燃え出しましたので、川に飛び込みました。周りにいたお母さんたちも子供抱いたまま川に飛び込みました。しかし川の中にはガレキがたくさんあってけがをしました。そのうち西側の家が燃え出すと、炎が川の中へ覆い被さるように吹き出してきました。とても熱いので私は濡らした上着をかぶって上流へと逃げました。ようやく岸が燃えていないところにたどり着き、グライダー訓練でよく知っている二葉山を越えて東洋工業に帰りました。

―八月七日に広島市内に行かれたのは、最初から己斐の辺りの学校を
目指してゆかれたのですか。

荒谷 母校がどうなっているのか気になったので行きました。土が熱かったのを覚えています。行ってみると高師の校舎は焼けて無くなっていました。構内の大きな防火用水槽の中で心理学の高橋先生が骨だけになっているのを見ました。

―そして寝るところを探して小学校にたどり着きました。そこに
山中高等女学校の生徒達がありました。制服の前側だけが残っていて、

それで「高橋」、「天野」という名前が分かりました。やけどがひどく起こしてあげたら、腕の部分の皮膚がばっとはげて真っ赤な部分が見えました。薬も何もない。みな「お母さん、お母さん」と呼んでいました。今の中学校1〜2年生ぐらいの女子生徒です。その子たちが四日目までにはみな死にました。夏なので、すぐウジがわくので、遺体を己斐の駅の国道に近い河原で焼きました。

—その後はどうされたのですか。

荒谷 高師卒業後は松江の学校に就職しました。しかし教えるための知識・能力が足りないことを痛感したため、辞職して広島文理科大学を受けたところ合格しました。

—広島文理科大学での学生時代はどうでしたか。

荒谷 原爆で建物が焼けたため岡山県倉敷市に疎開して授業をしていました。私たちは女学校の寮で寝泊まりしていました。先生方が倉敷まで通われて講義されていたのですが、先生がお見えにならず休講となるのが少なくありませんでした。

その後、一年ぐらいいして広島に戻りましたが、先生方の中には反対意見もあったそうです。私たちの研究室は（文理科大学本館）三階の時計の横の教室でした。原爆で破損して壁が落ち水道も通っていない状態でした。そこで自分達で壁を塗ったり炭を落としたりして研究室を使うようにしました。

また江田島の海軍兵学校に行き、化学の実験機材や文献を譲り受け

てきました。行ったら門番から「入ってはいかん」と言われたので、事情を説明したら「どうぞ、どうぞ」と通してくれました。戦災を受けなかったのが兵学校には良い物が揃っていました。特にドイツ関係の書籍は立派な物が揃っていました。おかげで私たちの研究環境を整えることができました。

参考資料

●勉強ができなかった学校生活

当時、私は二三歳で、広島高等師範学校理科二部（物理・化学専攻）の四年生でした。

中学校を卒業するまでは、呉市の実家で家族と住んでいましたが、広島高等師範学校入学後は、広島市東千田町にある『淳風寮』じゅんぷうりょうという学生寮で生活をしていました。

しかし、太平洋戦争が昭和一六年二月八日に開戦すると工場への動員が始まり、寝泊りも動員先の寮になりました。三年生からは軍事訓練も始まったので、勉強はあまりできませんでした。

●学徒動員と訓練の日々

広島市南観音町（現在の広島市西区観音新町）にあった三菱重工業株式会社広島機械製作所に動員されました。学校で化学を専攻していた私と同級生十数人、工員約一八人、徴用労働者の若い朝鮮人約二〇人は、ガスの発生炉を海岸に建設する作業を、物理を専攻していた学生は、機械製作の作業に従事しました。私は理科二部生のリーダーだっ

ため、しばしば高等師範学校に行き、学校の心理学教授でもある、高橋悦郎^{たかはしえつろう}学生主事から面談による指導を受けていました。

昭和十八年一〇月には徴兵延期措置が廃止され、大学、専門学校、高等学校、高等師範学校の学生は、医学歯学系を除いた理系の在学学生も徴兵されることになりました。二一歳だった私もすぐに戦場に行かなくていけない状態でした。私は父親に、先生になった方が安全と言われたので、広島高等師範学校を受けたのですが、入学当時から航空士官学校への転校を何度か考えたことがありました。そこで、航空兵の検査を希望し、受験したところ合格したため、その後は航空兵要員としてグライダーの訓練を行うことになりました。

グライダーの訓練をするようになってから、安芸郡府中町にある東洋工業株式会社にも動員され、会社内の寮での生活が始まりました。肺炎や痔^じを患っているという理由で、軍に召集されずに工場へ動員させる学生が十数人いたのですが、私は彼らのリーダーとして働いていました。私の仕事は東洋工業の河村郷^{かわむらじょう}四労働部長と相談しながら、広島市内と広島市近郊の女学校の先生たちと話し合い、三年生と四年生、約二、〇〇〇人の女学生に建物疎開作業などの指示を先生にすることでした。

●八月六日

その日は朝から快晴でした。私は同級生約一〇人と文系の一、二年生と朝食をとり、午前七時頃食べ終わりました。いつものように本館へ向かう途中、上空に銀色に輝く飛行機を一機見つけました。しかし

私は特に気にすることもせず、本館の中に入り、三階にいる河村労働部長と簡単に言葉を交わしてからトイレに向かいました。

トイレで用を足そうとすると、目の前が急に強い光になり、続いてやってきた爆風で体が吹っ飛び、後ろの壁に背中を打ちつけました。しかし、小さな窓だったため、けがというほどのけがはせずに済みました。

何が起こったのかと窓から広島市方向を見ると、大きなきのこ雲が見えました。その時は原爆が落とされたことなど知る由もありません。広島瓦斯株式会社^{ひろしまがす}の工場の真上からきのこ雲ができているように見えたので、そこで爆発事故が起こったのかと思いました。

下へ降りてみると、そこには顔や腕から血を流している大勢の工具が、医務室方向へ歩いていました。私は広島市内の建物疎開作業をお願いした女学生たちの安否が気になり、広島市へ向かいました。

自力で広島市の場町まで入れたのですが、それより先は火の海で、憲兵が立ち入りを禁止しており、女学生たちのことは諦めるしかありませんでした。その後、軍用トラックが来たので乗せてもらい、比治山の入り口まで行きました。その一帯は炎で熱く、私は炎から逃れるよう広島駅に向かって走りました。猿猴橋^{えんこうばし}を渡ろうとした時、猿猴川兩岸の家屋が燃え始め、近くにいた母親と子どもが川に飛び込み、流され、橋桁にかかって亡くなるのを目撃しました。私も川に入り、着ていた上着を脱いで頭に被って熱を防ぎ、川の上流へ向かって水の中を歩きました。

縮景園^{しゅくけいえん}を横切ったところで、二葉山に登れば東洋工業の様子も見え

るだろうと思ひ、山の燃えている場所を避けながら登りました。二葉山から東洋工業が燃えていないことが確認でき、再び東洋工業に戻りました。寮に到着したのは日付が変わった後だと思ひます。お腹が空いていたので、私はこっそりと食堂に入り、残っていた大根と味噌を食べるから、眠りにつきましました。

●再び入市

翌日、私は昼頃まで眠っていました。起床後、今度は広島高等師範学校の様子を見に行くために、再び広島市に向かいました。的場町から本通りを通って市の中心部に入りましたが、市内はがれきと死体ばかりでした。

学校に向かう途中、白神社しろかみしやの大きな楠が見えました。楠は熱線を受けた部分は真っ黒に焦げており、その反対側は焦げていない、奇麗な状態でした。その楠を見て私は、学校も燃えてしまっているだろうと思ひ、学校に行くのをやめて紙屋町へ向かって歩き始めました。紙屋町から北を望むと、広島城は跡形もなく崩れていました。広島城入り口の電車道近くに机が置かれ、軍刀を前にした陸軍将軍が座っていました。その隣には四人の陸軍参謀らしき人が立っていましたが見ただけなので、その軍人たちがそこで何をしていたのかは分かりませんでした。

骨組みだけ残った広島県産業奨励館ひろしまけんさんぎょうれいかんの前を通り、観音くわんおん（現在の広島市西区）に向かうと、橋の下に真っ赤に膨らんだ母親の乳首をくわえ、ピクピクと震えている赤ちゃんを見つけました。近づいてみると、母

親は既に亡くなっていました。直射日光が当たる場所には危ないと思ひ、私は赤ちゃんを抱きかかえ、救護所を求めて己斐こひ（現在の広島西区）へ向かいました。

●己斐国民学校での出来事

己斐山のふもと付近の家屋は燃えずに残っていました。私は赤ちゃんを抱いたままゆるやかな坂道を歩き、己斐国民学校にたどり着きました。学校の一階廊下の入り口が開いていたので中に入ってみると、そこには二〇人ほどの被爆した女性が収容されていました。

私は用務室の畳の上に赤ちゃんを置いて、瓶に入っていた水を飲んで気持ちをしめ、一番近い場所にいた女性のそばに座りました。女性を見ると、肌は赤く焼けただけ、当日着いたのであろう白いシャツが体の上に少し残っているだけでした。その残った白いシャツの上についている『高橋』と名前が書かれた白いバッチが目に入りました。私が「女学生？」と尋ねると、高橋さんはかすれた声で「はい」と答えました。そのとき高橋さんから、父親が広島高等師範学校心理学科教授の高橋悦郎だと聞き、まさかこんなところでお世話になった教授の家族に会うとは思っていなかったのだ、とても驚きました。

「私達は山中高女の一、二年生で、あの日は雑魚場町で建物疎開をしていました」と、高橋さんは自分たちがどこの学校の生徒なのかを教えてくださいました。しかし、そのときの私は学校名を聞いても、どこにある学校なのか分かりませんでした。

その後、廊下むらに筵むしろの上で横になり「お母ちゃん、お母ちゃん」と言っ

ている女学生を見かけたので、「寝返り打たせたるで」と言って寝返りをさせると、下に敷かれた筵むしろは血で真っ赤に染まり、彼女の皮膚ひふがはがれ、私の手にくっつきました。

配れる食べ物もなく、「痛い、痛い」と言う彼女たちをどうしてあげることもできず、私はその光景きやうけいに驚愕きやうがくするほかありませんでした。

収容されていた二〇人ほどの女学生も、連れてきた赤ちゃんも、八日の夜までにみんな亡くなってしまいました。一人また一人と亡くなる度、死体にウジ虫がわきました。全身をウジ虫で覆われた死体を見ると、私は寝ることができませんでした。赤ちゃんは夜中に亡くなったのですが、あのまま母親と一緒に死なせてあげても良かったなと、いまだに後悔しています。

周りに人がいなかったのです、私は朝から一人で校庭に穴を掘り、そこに女学生と赤ちゃんの遺体を運び、茶毘だびに付しました。その後、供養した遺骨の一部を太田川の河口に立ち、海へまいたことは、今でも覚えています。

戦後になって、広島大学原爆被災誌『生死の火』を読み、私は初めてあときき出た女学生たちが、広島市千田町にあった広島女子高等師範学校附属山中等女学校の生徒だったということを知りました。昭和二〇年の四月に山中高女が国に移管され、学校名が変更されたのですが、呉市出身の私は知らなかったのです。

●終戦後の生活

女学生たちの遺骨の供養を終えてから、私は学校の寮や実家には戻

らず、東洋工業で帰省した動員学徒生の荷物番をしていました。

終戦後も引き続き東洋工業にいましたが、あるとき、一八校の学校が、化学の先生を募集していることを知りました。その中に今の島根県立松江北高等学校からの募集もありました。島根県は「飯もおいしく、自然もきれいと良いことづくしだったので、早速島根に向かい、昭和二〇年九月二〇日頃から一年半、学校の先生と寮しやかんの舎監しやかんをして働きました。

校長と大げんかしたのをきっかけに教師を辞め、広島に戻りました。その後もう一度化学の勉強をしようと思い、昭和二二年に広島文理科大学へ入学しました。入学してからは、研究に専念しました。昭和六一年三月三二日に定年退官するまで、広島大学で講師、助教、教授を務め、名誉教授の称号をいただきました。

●後遺症

被爆者には後遺症でつらい思いをされた方がたくさんいますが、私は八月八日頃に突然鼻血が出た以外、症状はありませんでした。後遺症が全くなかったのです、実は被爆していないのでは、と考えたこともありました。三〇歳で結婚して二人の子どもに恵まれました。二世にも放射能の影響が出ることがあると言われていましたが、私は被爆後に鼻血が出ただけの健康体だったので、子どもが生まれるときも影響が出るという心配は一切しませんでした。子どもたちもそれぞれ結婚し、今では孫が五人、ひ孫が二人います。

●エネルギー問題について

今の日本は、電力を作るエネルギーを、自然から手に入れることができず、科学ばかりに頼っています。原子力発電もその一つです。

ものはいつか古くなったり、壊れたりして使えなくなります。そして使えなくなったものは処分しなければいけません。島根県の原子力発電所は、施設の老朽化が進んでいます。もし原子炉が壊れてしまえば、東日本大震災での福島県と同じように、原子炉から漏れ出た放射能によって、近辺の住民は住む場所を奪われてしまいます。しかし、壊れる前に廃棄しようにも、捨てる場所がないのです。

再び放射能による被害がもたらされないためにも、原子力発電に頼らず、原子炉の後始末の手段、事故が発生した場合の住民への対応について考えていくことが、今後大きな問題になると私は思っています。

(あらたに たかあき・広島大学総合科学部名誉教授)